許六『追善註千句』翻刻と略注（四）

牧　藍子
藤井美保子

本稿は、「許六『追善註千句』翻刻と略注（三）」（『成蹊人文研究』第二九号、令和三年三月刊）の前稿を継ぐものである。

【凡例】

一、句頭に番号を付した。
一、本文の行移りは原本とは一致しない。
一、振り仮名・送り仮名・濁点は全て底本のままとし、句読点などは私に付した。明らかに誤字と認められる文字には（ママ）と傍注した。
　略注の中で引用する文献については、私に濁点・句読点等を付した。
一、漢字は原則として現行の字体に改めたが、一部そのままとした。
一、片仮名は「ハ」「ミ」など、変体仮名と認められるものは平仮名に改めたが、小文字で記されたものなど一部そのままとした。
一、仮名・漢字のおどり字「ゝ」「〻」「々」「〳〵」はそのままとした。
一、※に逸丸筆写本に関する注記を示した。
　△に林篁筆写専宗寺旧蔵影写本との校異を示した。
　◎に句の季などを示した。
　○に略注を示した。

【翻刻・略注】

註千句

第四

1　田植女のねたらぬ空やほとゝきす

　賤の女のほね折てやすむ間なき短夜の大切をいふ句なり。

△「田植め」「時鳥」「句也」

◎「田植女」「ほとゝきす」（夏）

○田植女　田植をする女。植女とも。田植は限られた日に一挙に終えてしまう必要があるため、労働力を結集せねばならず、また普通の農作業より待遇がよかったこともあって、集団的な出稼ぎも行われた。「やまぶきも巴も出る田うへかな　許六」（『炭俵』）は、木曽義仲の愛妾である山吹や巴までが田植えに駆り出されると興じた句。「早乙女」に比べ、俳諧の用例が少ない。なお、本句は許六編『正風彦根体』（正徳二年（一七一二）刊）に収められる。○短夜　夏の短い夜。○ほと、きす　短夜の明け方に鳴く。

2 五月雨鶏に夜は明にけり

源氏物語に、さみたれ髪の打おほふまてといふ詞にすかる。手尓波留り脇、習あり。口伝。

◎「五月雨」（夏）

○さみたれ髪　乱れ髪。和歌では多く五月雨にかけて詠まれる。『源氏物語湖月抄』蛍巻に「あつかはしきさみだれがみのみだるゝもしらでかき給ふよ」とあり、その頭注に「五月雨がみの」と立項して、『細流抄』の「髪と云り。子規をちかへりなけうなひこがうちたれがみの五月雨のころ」、『花鳥余情』の「五月雨の中に女君の髪を打乱して絵を書給ふを云也」を引く。引用歌は『拾遺和歌集』夏部一一六番歌で凡河内躬恒の作。「五月雨髪」という語から、ホトトギスを「五月雨鶏」と表現した点が俳諧。「早乙女の五月雨髪や田植笠　菊阿」（『目団扇』）○手尓波留り　一句の結びが用言・助詞・助動詞などで終わるもの。脇句は体言で終わる韻字留が一般的。『去来抄』に「蕉門に手尓波留の脇、字留の第三を用ひる事はいかに」という卯七の問いに対し、去来は「発句・脇は歌の上下也。是を連るを連歌といふ。一句〳〵に切るは、長くつらねんが為也。歌の下の句に字留といふ事なし。文字留と定るは連歌の法也。是等は連歌の法によらず。歌の下の句の心も、昔の俳諧の格なるべし」と述べ、二例を挙げる。

3 溝川に銭をとらるゝ旅をして

瀬戸川、うるひ川の類。

○溝川　小さな川。○瀬戸川　大井川の東側で静岡県藤枝市の南を東に流れる。徒渉で、出水時だけ川越人足を必要とした（『日本歴史地名大系　静岡県』「藤枝市」）。○うるひ川　潤井川。富士宮市・富士市内を南東流して駿河湾に注ぐ一級河川。富士山の大沢崩れを源流とする。瀬戸川と同じく徒渉であった（『日本歴史地名大系　静岡県』「富士市」）。瀬戸川や潤井川のような、ふだんは歩いて渡れる溝のような川でも、出水時には川越人足や舟渡しに銭を払って川越しをした。

4 発句は出ねとすはる夕食

風雅の行脚、状をもらふて来たる。

○状　ここは紹介状。紹介状を携えてきたので、まずは落ち着き払って夕食の座につく。

5 初雪を詠める顔に降かゝり

雪見の会、どまくれたる一座の宗匠、呑物、喰物も味ひを覚えす。

△「覚へす」

◎「初雪」（冬）

○どまくる　どまぐれる。まごつく、うろたえる。俳席をうまくさばけなかった宗匠は、居心地が悪くてその後の食事も味わうどころではない。

6 西は青うてかたく下弦（ユミハリ）

あら風につれたちたる初雪、地にたまるほともふらて寒し。発句、脇に月次の月（ママ）たる時、かならす有明とはかり心得へからす。聞あき侍れは弓はり始てあたらし。

△「月出たる」

◎「下弦」（秋）

○かたく　かたぐ。傾く。○下弦　下弦の月。弓張月。夜半にのぼり、明け方に南中して昼頃に沈む。ここは、すでに日がのぼっている時間帯、青い空に沈みかけた下弦の月が白く光る様子。○発句、脇に月次の月たる時　発句や脇に一二か月の月名が出たときには、「月」の同字を避けるため（「月」は五句去）、「有明」などの語を用いて月の句が詠まれることが多いが、ここは「下弦」と詠んだ点が新しいという自讃。また、許六自筆の伝書『俳諧新々式』に「月次の月の発句に有明、連歌に三句、俳諧に二句去」とある。

7 芦の穂に湯の山舟の風の音

江戸（ママ）神崎の夜舟、苦の下冷（ひヘ）、夜を明し兼たり。

△「江戸」が「江口」。

◎「芦の穂」（秋）

○芦の穂　アシは水辺に生じるイネ科の多年草。ススキの大きいものに似る。川辺や水辺に群がり生え、風が吹き渡ると葉ずれの音をたてながら紫色の穂をいっせいになびかせて秋のあわれを誘う。許六は、『許野消息』において名所と名物の取合せの重要さを説く中で、「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり」（新古今集・冬・六二五・西行）を挙げ、「難波に蘆、奇妙にて候。いづれの草木にても一年のはやく過行き、枯葉に凩のわたるは同じ事にて候。此哥は芦にてなければ、人もはつと不申候」と、難波の蘆の枯葉に秋風が吹き渡る情景を詠んだ西行歌を賞している。なお、神崎は神崎川が大阪湾に注ぐ河口にある。○湯の山　湯山。有馬温泉の別称。除風編『青筵』（元禄一三年（一七〇〇）奥）には、「如月はじめつかた、湯の山にこもり侍るに、日夜に入重るくに〳〵の道者は、疵もの丶見あき也。一とせに二度は、いつもかくのごとく、たままつりも過ぬれば、耕作のいとまに、百性ばらの数万入込を、蓮の葉といひならはせるは、湯女のわる口也」という前書とともに「春先は蛙になりて湯壺哉　許六」の句が載る。なお、彦根藩第四代藩主井

伊直興は元禄七年九月から一一月、同九年九月から一〇月、正徳四年一〇月から一二月、享保元年（一七一六）一〇月から一二月の四度、有馬温泉に湯治に出かけている（『彦根城博物館叢書5　譜代大名井伊家の儀礼』彦根城博物館、二〇〇四年）。ただし、許六は元禄七年は一〇月一八日に義仲寺で行われた芭蕉追善に出座、同九年は彦根で芭蕉三回忌を営み、宝永七年（一七一〇）には井伊家を辞していることから、これに随行した可能性は低い。○苦の下冷　船底からくる冷気。○江口神崎　江口は淀川下流の宿駅。淀川・三国川の開削により、神崎川にあった神崎は江口とともに京都と西国を結ぶ交通の要衝となり、遊女の里として知られる。西行が宿を借りようとした江口の君の伝説は有名。神崎はまた、有馬温泉へ向かう玄関口であった（『日本歴史地名大系　兵庫県』「総論」）。○夜舟　淀川三〇石船の夜行客船。夕方出港して、翌朝終着河岸に着くよう運航した。

8　着たり敷ィたり蒲団やゝさむ

船ー中の不自由。

△「船中」音読譜号なし。

◎「やゝさむ」（秋）

○やゝさむ　秋の半ばから末にかけて感じる寒さ。許六伝書『俳諧新々式』に「秋のさむさの次第　涼しく　冷（ヒヤヽカ）　身にしむ　やゝ寒　肌さむ　夜さむ　朝さむ」とされる。「蒲団」は冬の季語だが、ここは6句目から続く秋の句の3句目。○船中　夜舟の中。あてがわれた布団を着たり敷いたりいろいろ工夫してみるもののやはり寒い。

ウ

9　武士の旅鎧一本に年暮て

手かるき江戸の旅ね。

◎「年暮」（冬）

10　長屋はつまる棚の半櫃

長屋すまひ、中棚に半櫃をあける。

○つまる　床に半櫃を置くと、ただでさえ狭い長屋の部屋がさらに狭くなるので、中棚に半櫃を置く。○中棚　中段の棚。○半櫃　半分の長さの長持ち。上等なものでなく、衣類や身辺の品を納めるのに用いた。

11　一戚の足袋に羽織の寺参

下夫の男、たま〳〵の町かよひ。寺参は八町堀の御堂か。

○一戚　財産をつぎ込んだような、せいいっぱいの綺羅を尽くしたもの。○たまたま　ときどき。○八丁堀の御堂　築地本願寺。東京都中央区築地三丁目にある浄土真宗本願寺派の別院で、元和三年（一六一七）に浅草横山町（日本橋横山町）に建立される。明暦三年（一六五七）の大火後、佃島の門徒が中心となって八丁堀海上を埋め

立てた現在地に移り、築地御坊と呼ばれる。東叡山寛永寺、三縁山増上寺、浅草本願寺とあわせて両山両寺と称せられ、特に幕府の特待を受けたという（朝倉治彦『東京年中行事1』平凡社、一九六八年）。

12 箸を大事に二十八日

二十八日は親鸞上人の命日。

△「大事に廿八日」

◎「二十八日」（冬）

○報恩講　仏教各宗宗祖の忌日に行う報恩謝徳のための法会で、浄土真宗のものが特に有名。陰暦一一月二二日から親鸞の祥月命日の二八日まで行なわれ、各地から多数の信者が東西両本願寺などに参詣した。『東都歳事記』巻四の「報恩講」の記事には「東本願寺　参詣の道俗、晴曇の分ちなく、東雲の比より寺前に群集し、惣門の開くを待て本堂に詣る事、更に間断なし。法会中、座敷に於て聴衆に斎非時（トキヒシ）をすゝむ」とあり、参詣の人でいっぱいになった本堂の挿絵が載る。ここは斎非時にあずかるため箸を持参したもの。

13 北浜にトタンもうけの代更（カハ）り

北浜は大坂、トタンは米商ひ。大坂歴々の本願寺宗おほし。

○北浜　本来、船場の北、大川河岸一帯の称。米市の立場のある所の俗称としても用いられた。○トタン　ここは米相場の異称。

14 舞台の板を炙（アブ）る新宅

むす子が奢、異見者もなけれは行ゑあふなし。

○舞台　近世の武家屋敷には大書院（書院床を持った大きな座敷）があって客間に充てられ、上層町人もこれにならった（『角川古語大辞典』「大書院」）。また、大書院の前には能舞台が作られるのが常であった（『日本大百科全書』「住宅」）。能舞台の板には高級な檜が用いられる。板を炙るのは反りを直すためか。

15 裏門の蹴はなしはづす車道

是は江戸の大名屋敷。

○蹴はなし　門の戸の下に設置して、内と外との仕切りをする溝のない敷居。高さがあるので、運送用の車などを引き入れるときには外した。

16 中を抓（ツマン）て結た若殿

○中を抓て結　元服前の幼い主君の髪型の描写。

17 堀越の毛鑓淋しき染幟

若殿の御見物。

◎「幟」（夏）

○堀越　ここは堀を隔てての大名行列の見物。○毛鑓　先端の鞘に鳥の羽毛を植えて飾りとした槍で、大名行列などの際に槍持ちが振っ

た。○染幟　五月の節句に戸外へ立てる幟で、武者絵などを色染めにしたもの。染幟が派手で目立つので、大名行列の毛槍が物足りなく見える。「定紋の破風に並ぶや染のぼり　孟遠」（『正風彦根体』）

18 袖で高はる紅（ヘニ）の紙付（キ）

節句前の呉服屋、縫箔の紙付、足もとをみて高はる。紙つきは片身つゝ紙を縫付たる染物をいふ。

△「見て」

○高はる　値段を高くつける。

19 茶を汲ゞてもてなす尼の丸頭巾

奥より呉服やの使は必尼なり。

△「呉服屋」「尼也」

○丸頭巾　上部が丸い頭巾。老人や僧侶がかぶった。○奥　武家の奥向き。

20 猫も杓子も常香の馨（カザ）

行ひすましたる尼の庵室。

△「馨（カサ）」

○常香　仏前に絶やすことなく焚いておく香。昼夜の別なく仏前にたき続けるため、何もかも香のにおいになる。前句の尼の住まいのさま。古典的な世界を面影とするような情景であるが、それを「猫も杓子も」という卑俗な言葉を用いて描写した点が俳諧。○行ひすましたる尼　仏道修行に専念している尼。「すます」は「事に専念する」という意の補助動詞。

21 閼伽桶（アカ）の芋茎（イモシ）の煤に花の雪

△「芋茎（イモジ）の煤の」

◎「花の雪」（春）

○閼伽桶　仏に供える閼伽水をくみ入れて持ち運ぶための手桶。普通は銅製。○芋茎　里芋の茎。芋幹（いもがら）。ずいき。干して保存し、煮たりゆでたりして食用とする。「芋の茎」「ずいき」は近世前期の歳時記『はなひ草』（寛永一三年（一六三六）奥）『毛吹草』（正保二年（一六四五）刊）『増山井』（寛文七年（一六六七）刊）『番匠童』（元禄二年刊）『俳諧をだまき』（元禄四年刊）『誹諧大成新式』（元禄一一年刊）等に「芋」の傍題として八月に挙げられるが、ここは春の句。なお、『毛吹草』には「芋がら」が「非季詞」として載る。煤は炭素の黒い微粒子であるが、「芋茎の煤」は未詳。単に黒っぽい汚れを「煤」といったものか。○花の雪　美しく散りかかる白い花。生活感のある黒ずんだ芋茎の煤とは対照をなす。

22 松に粉の散ル下の蕗（フキ）原

松の花、春なり。

△「春也」

◎「松に粉の散ル」（松の花）・「蕗」（春）
○松の花　松は四月頃、新芽の先に二、三個の紫色の雌花を、新芽の下の方に薄茶色の雄花をつける。松の花が散るというのは、雄花の花粉が風に吹かれて飛び散ること。千年に一〇度咲くとされ、祝賀の意にも用いられるが、ここは属目の景である。近世前期の諸歳時記に一月。○蕗原　蕗の薹が顔を出している野原。「蕗の薹」は『はなひ草』『誹諧初学抄』（寛永一八年跋）に二月、『毛吹草』『増山井』『番匠童』以下に一月。

二

23 雉の耳すほめて帰る朝霞

聞すえ鳥、ない鳥かり、春也。雉也。野より朝毎に尾上に帰る鳥の事なり。此尾、雉いくつ有といふことを知ル。
△「ない鳥、春也」「鳥の事也」「といふ事」
◎「雉」「朝霞」（春）
○ない鳥かり　鳴鳥狩（ないとがり）。朝鷹。夜分、雉子など鳴いている鳥の場所を覚えておいて、翌日の早朝、鷹にこれを獲らせるもの。「聞すえ鳥」も同じ。許六伝書『俳諧新々式』には「朝鷹、白尾の鷹、継尾の鷹、ない鳥かりは、鳥の声につきて合する事也。鳥さけびの声、共に春也。朝鷹の事也。狩場の雉子は冬也。音声とすれば春也。聞すへ鳥、春也。ない鳥狩、同前。泊り山とて山にねて、暁鳥の鳴を聞すへ、此谷彼尾にいくつあると聞すへて狩立る事也」と、自注と同様の記述が見える。近世前期の諸歳時記においては、『はなひ草』『通俗志』（享保二年序）に一月とするも、『俳諧初学抄』『増山井』『番匠童』以下、二月とするものが多い。○尾上　山の高いところ。

24 中の蔵王の峯の気疎さ

中の蔵王は吉野山なり。後京極の哥に
〽さいたつままたうらわかに三吉野丶かすみかくれに
きゝすなく也
△「吉野山也」「啼なり」
○中の蔵王　蔵王は蔵王権現の略。修験道で本尊とする権現を蔵王権現といい、吉野山の金峰山寺の本堂の蔵王堂等に本尊として祭られる。○気疎さ　薄気味の悪さ。○後京極の哥　後京極といえば、後京極摂政九条良経のことであるが、引用歌は『万代和歌集』や『夫木和歌抄』に平忠度作として載る。サイタヅマは春の若草。朝霞の中、ねぐらに帰る雉子を詠んだ前句からの付筋の説明。

25 うつすりと達广の荒（アレ）に雪か来て

たるまの荒は達摩忌也。十月五日。吉野郡、禅寺多し。
達广よく聞知たり。
△「達广忌」「おほし」「たるまよく」
◎「達广の荒」「雪」（冬）
○うつすり　うっすら。ここは一〇月の薄雪の形容。「先積かくると

しの物成　蘭（嵐蘭）／うつすりと門の瓦に雪降て　六（許六）」（『深川』元禄六年刊）○達摩忌　禅宗の初祖達磨の忌日。達磨は梁の大通二年（五二八）一〇月五日に遷化したと伝えられるところから、一〇月五日を忌日とし、この日大小の禅院で法会を修する。○荒　荒天。

26 魚屋出てまつ沖の鱈船

越路の浜。

◎「鱈船」（冬）

○鱈船　鱈をとる漁船。『本朝食鑑』（元禄一〇年刊）巻八「鱗部之二　江海有鱗」の「鱈」の項には、「東・西・南海、未だ見ず。但、北海の諸浜、多く之を出す。三・越・佐・能及び若・丹・但等の州、或は奥羽の海浜北に向ふ処、冬毎に之を采る。（中略）今時官家之を珍賞す。故に、北州及び奥羽の大守刺史等、争て之を献ず。孟冬開炉の茗会の際、京師・江都新奇を好み、或は冠昏大饗の餽（おく）りもの、之を賞して平魚に減ぜざるなり」（原文の返り点、送り仮名にしたがって私に書き下した）と見え、当時珍しいものとしてもてはやされていたことがわかる。また同書には「塩を以て口腹に盈るときは久しくして腐らず」とあり、多塩のものは下品、微塩のものが上品とされた。ここは、できるだけ新鮮な状態の鱈を手に入れようと魚屋が漁船を待ち受けるさま。

27 姑（シウトメ）の気に入ル聟の膝直し

○膝直し　婚礼の後、嫁の実家で新郎新婦を招き、一家一門への披露宴を開くことや、その祝宴。『嫁娶重宝記』（元禄一〇年刊）巻二「膝直しの作法」には、「舅の方へ夫婦共によぶ事也。此時は上下もきず、はかまばかりにて、常の一汁三さいの料理にてよぶべし。一門の内にても若き衆のこゝろ安き方、又聟の友達を四五人よぶ事也。膳前にても又食過（めしすぎ）にてもおくへ通り、姑にもたいめんあるべし」とある。なお同書の「膝直し」の前には、新郎が初めて舅方に招かれる「打あげ」、新婦の「里帰り」の項目があり、それぞれかしこまった作法が記されるのに対し、「膝直し」は打ち解けたもてなしの場であったことがうかがえる。

28 足にまつはる下女かおかいこ

着つけぬ一戚の小袖、けふをはれと出立。

○おかいこ　蚕は人の益となる貴重な昆虫なので、丁寧に「お」を付けて呼ばれた。蚕の糸から作る絹織物や絹の衣類のこともいう。晴れの日ということで、めったに着ることのない絹の小袖を身に付ける下女の様子。

29 掃初に二日の朝の新莚（アラ）

△「新」ルビなし。

◎「新莚」（春）

○掃初　正月二日に、新年初めて屋内を掃くこと。元日は福を掃き出さないように、また神祭りに服しているしるしとして、掃除をしない風習が広く行われる。○新莚　新しい莚。正月に神前や門飾りとして飾られる掛け莚ともされるが、「元日に敷ばや真野のあら莚　正秀」（『続別座敷』）などでは、敷くものとして詠まれている。また『宇陀法師』で許六は、朱廻の「正月や先ッきよき物あら莚」の句について、「清少納言『枕双紙』に、「清き物　かはらけ」といへり。「正月」の五文字に力あるべし」と述べる。『枕草子春曙抄』には「きよしと見ゆる物　かはらけ。あたらしきかなまり。たゝみにさすこも」とあるので、やはり敷く莚が想定されているようである。よって、当該句も正月に新しく敷く莚がイメージされていると考える。掃初との取り合わせとしても、掛ける莚より敷く莚の方がふさわしい。

30 通添（カヨヒ）たる年玉のさけ

二日を旨と見るへし。年玉の徳利にことしの新通（アラ）とそへて、酒旦那をはつさせす。年〳〵の払、よく済と見えたり。

△「通ひ」「年玉の酒」「新通（アラ）そへて」「見へたり」

◎「年玉」（春）

○通　通帳（かよいちょう）の略。商人が得意先へ渡しておいて、掛け買いのとき、品名・数量・金額・月日などを記録して、後の清算に備えた。○年玉　新年の祝いの贈り物。安物の扇、塗箸、半紙などの粗品が多かったが、ここは酒。年玉といいつつ、ひいき筋の客が支払いをかわせないように、新しい通帳が添えられているというおかしみ。

31 肱曲（ヒヂマガ）る塀の雫の春の雨

台所の馬出（シ）。

△「肱（ヒジ）」

◎「春の雨」（春）

○肘曲る　肘が曲るように、ほぼ直角に折れ曲ること。○馬出（シ）　城門前の堀の対岸に設けられた土手や塀。人馬の出入りを敵に知られないよう三方を囲むとともに、城の入り口を防御する。形態によって角馬出、丸馬出などがある。ここは台所と通じた角馬出。

32 兄弟ならふ部屋の鶯

長屋つゝきのむす子の部や、近年小鳥のはやり、鶯が仕合か不仕合か。

△「ならぶ」「むすこ」「部屋」

◎「鶯」（春）

○長屋　長い棟の建物の中をいくつにも区切り、一区切りごとに一戸とした住まい。武家屋敷のものは下級武士や中間（ちゅうげん）などの住居とされ、町家では多く貸家とされた。ここは前句から、武家屋敷の長屋。○小鳥のはやり　細川博昭著『大江戸飼い鳥草紙』（二〇〇六年、吉川弘文館）に載る、江戸時代の鳥の飼育書・解説書の一覧（一四五頁）によると、本千句の成立した宝永七年には『喚子鳥』、七年後の

享保二年には『諸禽万益集』という鳥に関する総合解説書が刊行されている。また細川氏によると、こうした鳥の総合解説書の多くが武士の手で書かれているという。○鶯　前掲『大江戸飼い鳥草紙』には、鶯の飼育はすでに室町時代から行われ、江戸時代には鶉と並んで人気であったことが記される。

33 馬に乗ル人と下から咄して

家中の責馬、門〳〵に出て見物。

○家中　一藩の武士の総称。○責馬　馬を乗りならすこと。調馬。

34 足駄を脱ヌイで通る若党

溝石をつたふ数寄屋。足袋の下馬、いと笑止なり。

△「足袋」の「足」の字、脱落。

○足駄　下駄のうち、差歯の高いもの。○若党　室町時代までは若輩の侍の意で用いられるが、江戸時代には武士に仕える軽輩の従者を指す。武家奉公人の一つで、身分は足軽・中間・小者より上で徒士より下。帯刀は許されたが騎乗は許されなかった。○溝石　ここは足場として溝に置かれた石。○数寄屋　草庵風の茶室、また茶室風につくられた建物。○下馬　下馬先の略。下馬先とは、下馬（社寺の門前、城門の前など、下馬すべき場所）で槍持ちの供奴が主人に対して行う作法の一つ。頭を少しかがめて手先を上げ、手を振り腰をひねって足取りをそろえて歩くもの。ここは、足駄を履いていては数寄屋へ続く溝石をたどりにくいので、足袋の状態で下馬先を行うさまがおかしい。

35 西風に片原町の朝の月

片原町、城下にかきらす。

◎「朝の月」（秋）

○西風　西から吹く秋の風。○片原町　片側だけ家並のある町。もの寂しいさまが、西風、朝の月の情趣によく通う。

36 ねふかを請て帰る露霜

朝のさむさをいふ。

◎「露霜」（秋）

○ねふか　根深。葱の異名。『毛吹草』『増山井』『番匠童』『誹諧大成新式』等、近世前期の諸歳時記に一一月とされるが、ここは秋の句なのでとらない。○露霜　秋から冬にかけて置く露や霜、または晩秋に降りた露が凍って薄い霜になったもの。

二ウ

37 苅ごきに田つらの人の秋日和

刈ごきは中稲テのこほれなり。荷ひかつくことにこほるれは、刈とひとしく其田の中にてこくを云。

△「苅ごきは中稲テ」「こほれ也」「かつく毎に」「こくをいふ」

◎「秋」（秋）
○苅ごき　『日本方言大辞典』に、「刈ったそばから稲こきをすること」とある。俳諧の用例は少ないが、『正風彦根体』に「刈ごきや螽のぬける籾とをし　凍郊」という句が見える。○田つら　田のおもて。田の中。○秋日和　秋晴れの穏やかな天気。○中稲　早稲と晩稲の中間の時期に成熟する稲の品種。

38 鵙の木玉のあたま勝なり

△「勝也」
◎「鵙」（秋）
○鵙　スズメ目モズ科の鳥。全長約二〇センチメートル。秋に平野や人里に出て、縄張りを主張し、鋭くけたたましい声で鳴く。ここは、その秋季の鳴き声が山や谷などに反響するさま。○あたま勝　始めは大きくて、終わりは小さくなること。

39 熊川の関見かへりて渡る厂

熊河は若狭、近江の境の関の名。

△「渡る雁」「熊川は若狭」
◎「渡る厂」（秋）
○熊川　熊川宿は、福井県三方上中郡若狭町南部の地区にあたり、若狭と京都を結ぶ若狭街道の要地として古くから栄えた地（『日本大百科全書』）。若狭街道は、近江国今津（滋賀県高島郡今津町）から国境を越え、熊川を経て小浜（福井県西南部）へ至る道で、戦国時代には湖東の商人が往来した九里半街道として知られた（『日本歴史地名大系　福井県』「総論」）。

40 岩に山目（メ）のあたる材木

山目は材木の跡先に藤をつなく穴をいふなり。川流の筏なり。

○川流　『日本大百科全書』「筏」の項目に「木材流送用の筏の組み方」として「普通、横列に組むときは、材端を藤づるや針金で巻き付けたり、材端に目途（めど）とよばれる穴をあけるか、または鉄環を打ち込んで、これに藤づるや針金を通して連結する。さらにこれを縦列に連結するときは、河川の屈曲状態にあわせ、目途と目途を藤づるで結ぶか、前後の筏が動かないように両側に長材を添えて連結する」という解説が載る。この記述のうち目途というのが「山目」に当たろう。また、高島郡今津町と高島町の間にある安曇川（あどがわ）町には、中世に安曇川を下る材木を扱う材木座が置かれ、安曇川舟運と琵琶湖舟運の結節点として繁栄していた（『日本歴史地名大系　滋賀県』「安曇川町」）。

41 逆（サカ）水に道のほれたる雨はれて

○逆水　川の水が、本来の流れとは逆の方向に流れること。また、その逆流する水。大雨で水かさが増し、本流から支流に水が流れ込

んだ。○ほれたる　ラ行下二段活用の「掘る」。土地などがうがたれてくぼまること。

42 梢にかゝる松の浮雲

山中の雨晴。

○浮雲　「浮雲」は「雨」の付合語（『類船集』）。ここは前句から視線を上に向け、視界に入った景を軽く付けた。

43 斎腹の詰も消行暮の鐘

栂尾、槇尾のさひしきを云。斎の詰は餅也。

○斎腹の詰　斎は法要などの際に、檀家が僧や参会者に供する精進の食事で、斎詰（ときづめ）はその点心、おやつ。『浮世親仁形気』（享保五年刊）巻二の三「殺生を楽しむ仏嫌ひの親父」に「毎日斎詰に五文取の餅廿づつしてやられ」と見える。○栂尾　京都市北西部の地名。高尾、槇尾とともに三尾とよばれ、紅葉の名所として知られる。三尾のうちでは北端に位置する。一三世紀初頭、明恵が高山寺を再建し、この地の中心となった。また栄西が中国から持ち帰った茶が、明恵によって初めて栽培された地ともされる。○槇尾　今の京都市右京区梅ヶ畑槇尾町。栂尾と高尾の中間にある。建治年中（一二七五～七八）には和泉国槇尾山寺の自証上人が西明寺を再興した。

44 焙炉崩してたゝく茶莚

栂槇は茶の名所。今の宇治より先なり。

◎句意から春。

○焙炉　木の枠や籠の底に厚手の和紙を張り、遠火の炭火で茶や薬草などを炙って乾燥させる道具。『和漢三才図会』（正徳二年序）巻三一「庖厨具」の「焙籠（ほいろう）」の項には「按ずるに、焙籠は薬種及び茶を焙るの籠なり。其の底に紙を張る。凡そ火にて物を乾かすを焙と曰ふ」（原文の返り点、送り仮名にしたがって私に書き下した）とある。○茶莚　揉み茶を干すむしろ。『農業全書』（元禄一〇年刊）巻七「四木之類」の「茶」の項には、焙炉を用いた茶の製法として「上茶」「湯びく茶」「煎じ茶」の三種が載る。そのうち「煎じ茶」の説明に「わか葉古葉残らずつみ取て、あくにてざつと湯がき、是も冷水にてひやし、よくしぼりあげ、莚に攤（ひろげ）干し、少汁のかはきたる時、莚の上にてもみ、或縄莚を作り、其上にてあらくもむ事三遍ばかり、さら〳〵と干たる時、とをしにかけをくもあり、つよきほいろにてあげ火を一遍取たるは猶よし」とあり、茹でて柔らかくした葉を莚の上で揉んだ後、焙炉にかけたことがわかる。新芽を用いる「上茶」は、まず蒸した葉を薄くひろげて団扇で冷ましてから焙炉にかけ、また若葉を用いる「湯びく茶」は、茹でた葉を水で冷やして焙炉にかけるとあるが、いずれも莚の上で揉む行程は記されない。ただ「湯びく茶」については、焙炉にかけた後に莚にひろげて乾かした可能性もあるか。「背中へのぼる児をかはゆがる　桃隣／茶むしろのきは

づく上に花ちりて　子珊」（『炭俵』）

45 姥のはる水の溜（タマリ）に鳴蛙

井戸のはた、米泔（シロミズ）の溜り溝、棒ふり虫の住所。

△「米泔（シロミヅ）」

◎「蛙」（春）

○米泔　白く濁った米のとぎ汁。○棒ふり虫　蚊の幼虫。ぼうふら。小川・溝・池・水たまりなどの水中にすむ。

46 留守居はかりて華は散けり

田家にもかきらす。里坊にもかきらす。

◎「華は散」（春）

○留守居　主人や家人が不在のとき、留守番をすること。○里坊　山寺の僧などが人里に作っておく僧房。

47 打続き山の大会も不世の中

五千石の不作、大会もならす。山の大会、寺の灌頂、大法事也。山の灌頂、寺の大会は軽き事也。

○山の大会　比叡山延暦寺における大規模な法会。○五千石　延暦寺は豊臣・徳川両氏によって寺領として五千石が安堵された（『国史大辞典』）。○寺　園城寺（三井寺）のこと。○灌頂　水を頂に灌ぐ意。もとはインドで国王の即位や立太子の際に行われる儀式であったが、密教では法脈を師から弟子に相承する儀式や密教を広めるための法儀として行われる。

48 新都の沙汰につまる借（リ）かし

都うつりのこなし。

○都うつり　遷都。○こなし　「熟す」の連用形の名詞化で、俗にくだいて表現すること。第一百韻36句目の自注に「陣事・大裏沙汰、こなしを第一とす」とあることから、ここは「都うつり」という「大裏沙汰」を、世の中の不景気という世俗的な観点からとらえて一句とした点を「こなし」とするとみる。「こなし」は、巻二百韻45句目、巻三百韻25句目・26句目、第三百韻61句目の自注にも見える。

49 明（キ）屋敷桐の葉分（ヶ）の三日の月

徹書記の哥に　〻ちりねたゝ見ぬもろこしの鳥もねし桐の葉分の秋の三か月　是世を諷したるとて流されたり。

◎「三日の月」（秋）

○桐の葉分（ヶ）　桐の葉の一枚一枚。和歌では「葉分の月」「葉分の風」「葉分の霜」などと詠まれる。ここは、三日月の光が、桐の葉と葉との間を分けて深く差し込むさま。○ちりねたゝ　『草根集』に「ちらせなを見ぬもろこしの鳥もねず桐の葉分の秋の三日月」、『畠山匠作亭詩歌』に「ちらせ猶みぬもろこしのとりもねず桐の葉わくる秋の三日月」の形で正徹作と載るが、本千句で挙げられる形や、この歌

がもとで配流されたという逸話については未詳。

50 墓風（ノワキ）の跡の茄子おこする

◎「墓風」（秋）

○墓風　「暴風」に通じ、野分のこと。『毛吹草』「連歌四季之詞」の「中秋」に「墓風（のわき）」と載る。「屋ねまくる墓風の中や虫の声　李由」（『韻塞』）○おこす　掘り起こす。

三

51 駿河から船で廻すが船西瓜

江戸にて山西瓜といふ。四谷、市谷の辺リ出て江戸廻リの産也。船西瓜といふは、浜筋より舟にて付るを云にはあらす。駿州は暖国にて、瓜茄子の類もよく出来る。するかより船にてまはすを船西瓜といふなり。

△「舟にて付るをいふ」「船西瓜といふ也」

◎「西瓜」（秋）

○西瓜　日本への渡来については諸説あるが、『農業全書』巻三「菜之類」の「西瓜」の項に「西瓜、水の多き物なるゆへ水瓜と云にはあらず。是もと西域〈てんぢく〉より出たる物也。故に西瓜の号あり（中略）西瓜は昔は日本になし。寛永の末初て其種子来り、其後やうやく諸州にひろまる」とあるのをはじめ、寛永年中（一六二四～四四）とするものが多い。『毛吹草』巻四の「諸国より出る古今の名物」の中に、肥前と薩摩の名物として「水瓜」が載るが、『本朝食鑑』巻四「蔬果類五種」のうち「水瓜」の項には「処処多く之を種」江東（注：関東）最も美なり」とされ「江都郊外の田圃に多く之を種」て貨殖のたねとしたという。また同書には、江戸では熟瓜（まくわ）も出回るが、庶民の口に入るものは粗悪であったのに対し、「水瓜、最も多く價も亦賤ふして上下相隔てざる故に、民俗食する所も亦悪からず」とある。『八十翁疇昔話（はちじゅうおうむかしばなし）』（享保頃成）には「昔は西瓜は歴々小身とも喰事なく、道、辻番抔にて切売にするを、下々中間など喰事也。町にて売ても喰人なし。女などは勿論也。寛文の頃ゟ小身衆調て喰ふ。夫より段々大身大名も喰様になり、結構なる菓子になりぬ」と見える。○江戸廻リ　江戸周辺。○船西瓜　西瓜を切って中身をえぐり取ったものをいうようであるが、ここは船で輸送された駿河産の西瓜のこと。

52 むく起にして帰る吉原

江戸舟着の朝けしき。

◎「吉原」（恋）

○むく起　むっくり起きるとそのまますぐに。○舟着　吉原通いの船着場は駒形（東京都台東区）にあった。『江戸名所記』（寛文二年刊）巻三「浅草駒形堂」の項に「浅草川の舟つきにして、かの吉原にゆくものも猶こゝを舟つきとさだむ。前に茶屋あり」とある。

53 しやん〳〵と料理して居る夷講

夷講の大祝ひ、江戸は上方に十倍せり。

※「方」は「手」を抹消して左傍に記す。

△「居る夷講」の「講」の右傍に「講」と補記。

◎「夷講」（冬）

○しやん〳〵　元気があって、動作や態度のてきぱきしたさま。○夷講　一〇月二〇日、商家で家業の繁栄を祈願し、家内で恵比寿神を祭る行事。酒肴を設けて一家親類、取引先を招いて饗応した。正月二〇日にも祝われる場合があるが、『毛吹草』『増山井』『誹諧大成新式』等、近世前期の諸歳時記に一〇月。江戸と上方では趣を異にし、同日上方では、平生客を偽って掛け値をした罪ほろぼしをする、誓文払（せいもんばらい）という行事が行われた。ここは、夷講のごちそうの準備に忙しい台所の様子。「夷講の中にかゝるや日本橋　菊阿」（『正風彦根体』）

54 入湯の中に白き顔つき

○入湯　直接釜を連結せず、別に沸かした湯を桶に移し入れて入浴する風呂。居湯（おりゆ）。『新編日本古典文学全集71　松尾芭蕉集（2）』の連句編「「狂句こがらしの」の巻」（『冬の日』所収）35句目「綾ひとへ居湯に志賀の花漉て」の頭注に「桶に焚き口の付いた水風呂の一般化していた江戸時代では、居湯は古式を守る宮中や貴族の家のものであろう。」とされ、ここもそうした貴人の入浴のさまか。

55 猫の出ル穴から埃（ゴミ）を吹込ンて

湯殿のはり、窓さむし。

○埃　細かい塵。

56 火消は中で戻るしつかさ

から風、此中にあり。火消といふ句は禁忌にして、戻るといへは目出たし。

○中　途中。ここは、火消しが火事の現場に向かったが、火がおさまったので途中で戻るところ。○から風　冬の天気の良い日に吹く北西の季節風。乾燥した激しい風。からっ風。江戸にはよく吹き、そのため火事になると火のまわりが早い。近世前期の諸歳時記には載らない。

57 汁の実の煮へる間に夜は明て

た、夜明と見るへし。むつかしき事なし。

○汁の実　汁物の具材。

58 蒲団をくゝる駕籠の手拭

旅の朝戸出。

○蒲団　駕籠の中に敷く駕籠蒲団。朝、申し合わせておいた昨日の駕籠舁きが宿に迎えに来てこれから出発するところ。駕籠蒲団を使用することから客は貴人か。「蒲団」は『はなひ草』に一一月、『増

山井』『番匠童』『誹諧大成新式』等に一〇月とされるが、『毛吹草』「非季詞」に「馬上のふとん」、『増山井』「非季詞」に「のりかけぶとん」の語が見えることから雑の句ととる。○朝戸出　朝、出立すること。歌語。

59 岩穴の箱根にかゝる鉦の音

初音の原の修行者、三嶋より上る坂口の岩穴にすまひする事久し。

△「すまゐ」

○箱根　関東における山岳信仰の霊場、修験道の行場。岩穴は岩窟のこと。○初音の原　初音ケ原。三島宿から東海道を東進すると、箱根西坂の急な登り道である今井坂と愛宕坂にかかり、これを登り切ったところの、松並木の続くあたりが初音ケ原と呼ばれた（『日本歴史地名大系　静岡県』「三島市」）。○坂口　坂ののぼり口。

60 松から松へつたふ木啄

◎「木啄」（秋）

○木啄　キツツキ目キツツキ科の鳥の総称。種類が多いが大部分の種は森林に住み、樹木の幹の根もと近くに垂直に止まり、上へまっすぐ、あるいはらせんを描いて登りながら餌をとり、上まで登ると飛び立って別の木の幹に移動する。また繁殖期には、雄は中空の枯れた幹や枝をくちばしですばやく連続的にたたき、タララ、コロロロと聞える大きな音を出す（『世界大百科事典』）。

61 一様に尾花うなつく秋の風

◎「尾花」「秋の風」（秋）

○尾花　ススキの花穂。形が獣の尾に似ているところからこの名がある。花薄（はなすすき）。花が枯れ始めると、穂はいよいよ白く目立つようになる。ススキの穂がなびくさまを「うなづく」と詠む例はそれほど珍しいものではない。

62 馬から落て哥をよむ月

遍昭僧正なり。女郎花はなけれと、慥に此原にはあるへし。

△「女良花」

◎「月」（秋）。句意から恋。

○遍昭僧正なり　僧正遍照の「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな」（古今集・秋上・二二六）。『古今集』仮名序に「嵯峨野にて馬より落ちてよめる」との詞書があり、『三冊子』にも「さが野の落馬の時よめる也」とされることから、ここは嵯峨野の月。

63 菎蒻の髪剃喰ふて酒を呑〻

東路の旅、都ちかき茶店のこんにやくは三角にして二ツざし、髪剃田楽は都近きにはあらす。

△「酒ヲ」「こんにやく」
○崑蒻の髪剃　未詳。剃刀のような形のこんにゃくのことか。『和漢三才図会』巻二五の「剃刀」の説明に「長さ五六寸、鋒尖無し」とあるのを参考にすれば、長辺二〇センチ弱の細長い四角形のこんにゃくか。○東路　京都から東国へ行く道。○田楽　こんにゃく、魚、なすなどに味噌を塗って炙った料理。

64 きせるでなくる犬の横頬

腰懸茶やの飼犬、喰さしにて命をつなく。されと口のはた、つく〳〵まほり居もうるさし。

△「なぐる」「茶屋」
○腰懸茶や　道端や社寺の境内に、腰掛などを置いて葭簀を掛けた簡略な茶屋。通行人を休憩させて湯茶を供した。犬に口元をじっと見つめられては落ち着いて食べられない。

三ウ

65 表替へ蘭臭き香さをたて込ッて

年来の飼犬なしみて畳の上にのほる。

○表替へ　畳の表を新しいものに取り替えること。○たて込　とじこめる。

66 仕舞ほめたる年の暮かな

畳の表かえに目を付かへる。

△「哉」
◎「年の暮」（冬）
○仕舞　能一曲のうち、クセやキリなど、シテの所作の見せ所だけを、紋付袴または裃姿で地謡のみを伴奏に舞うこと。元禄頃には五代将軍徳川綱吉が愛好してしきりに演じたが、その「仕舞」は囃子をともなっており、現今でいうところの「舞囃子」であったという（『新版能・狂言事典』平凡社）。綱吉に続いて六代将軍家宣もまた能に熱中した（『岩波講座　能・狂言　Ⅰ能楽の歴史』岩波書店、一九八七年）。ここは新年に向けて表替えを行った座敷で仕舞を舞う武家の年末のさま。

67 行灯でお鉄醤付子女子共

大年の夜更て、下女共正月を作る。

△「付子女子」が「付る女子」。
◎「お鉄醤」「女子共」（恋）
○行灯　暗いうちから化粧して正月を迎える準備をする。○お鉄醤　鉄漿で歯を黒く染めること。『女重宝記』（元禄五年刊）巻一の「女けしやうの巻」に「お歯黒といふは公家のことばなり。御所がたにてはふし水共、ぬきすの水ともいふなり。下〳〵にてはつけがねといふなり」とあるのを参考にすれば、ここは公家衆の下女たち。

○大年　大晦日。○正月を作る　ここは正月のおめかしをすること。

68 ひんと鳴りたる半櫃の錠

講尺すれは第二に落ッ。

△「鳴りたる」「すれば」

○ひんと　ぴんと。錠前をしっかり掛けるさま。○半櫃　10句目の注参照。前句と合わせて解釈すれば、ここは化粧道具を入れてある小型の櫃。○講尺　講釈。ここは、解説しては面白みがなくなり、二流の句になってしまうということ。

69 染置の紺の紬をたぐりかけ

※「紬」は「細」の字に見える。林篁筆写専宗寺旧蔵影写本も同じく「細」。

○染置　前もって染めておく。染めたままにしておく。○紬　真綿や玉繭から紡いだ糸で織った絹織物の一種。色無地や縞、絣物を主とするが、後染用の白生地もある。一般的な絹織物に比べ光沢に欠け、紬糸の質から生じるざっくりした風合いが特徴。『和漢三才図会』巻二七の「紬」の項に「紬は綿の端緒（イトグチ）を抽引て糸と為す。故に細緻ならず。然して久く敗紕（ヤブレヨラ）ず。民間褻（け）の衣と為して可なり」とある通り、近世、質素な町人の着用に適するものとして広く用いられた。「商人のよき絹きたるも見ぐるし。紬はおのれにそなはりて見よげなり」（『日本永代蔵』巻一の四「昔は掛算今は当座銀」）○たぐりかけ　たぐり寄せ、肩に引っかけるようにして着る。

70 余所へも行す人も来ぬ也

此句、理屈なけれは付ず。たゝむさきほとしわき人と見るへし。

△「なけれは付ず」の「は」の字、脱落。

○理屈　道理。わけ。前句の人物を、うっとうしいほどけちな人物とみた。

71 あかり取ル窓の通りの雪除（ノケ）て

越路の大雪、窓の筋を少しあけてあかりを楽しむ。

△「少（シ）」「ああけて」と衍字。

◎「雪」（冬）

○越路　越前・越中・越後三国の総称。

72 針のみゝずにしごく糸口

年より女の手わざ。

○みゝず　針の穴。針の穴に通すために糸の先をしごく。

73 入聟の親とまきれる老女房

◎「入婿」（恋）

○老女房　夫よりも年上の妻。

74 向ひの娘ほれられに出る

◎「娘」（恋）

75 月花に祇園の鳥井御繁昌

京衆の詞、お山の外、茶たて女を香車といふ。是も売ル也。

赤まへたれの部類。別名二瀬（フタセ）共、花車共。

△「二瀬（フタ）」

◎「花」（春）

○祇園の鳥井　正保三年、祇園八坂神社の南楼門外に建立された石鳥居。八坂神社には三つの鳥居があったが、四条京極の東にあった一の鳥居は洪水で流失し、四条大橋東詰にあった二の鳥居は応仁の乱後復興されなかった（『日本歴史地名体系　京都市』「八坂神社」）。これは旧三の鳥居で、現在は重要文化財に指定されている。浅井了意の『かなめいし』（寛文三年頃成）に、寛文二年五月一日に京都を襲った大地震によってこの石鳥居が倒壊し、茶屋の者や客たちが逃げまどうさまが描かれる。○お山　上方語で遊女。○香車　遣手のこともいうが、ここは「茶たて女」とあるので、茶屋に雇われて接客をたてまえとした私娼。○赤まへたれ　赤い前垂れ。近世、宿屋、茶屋、遊廓など、客に接して座を取り持つ女が用いた。○二瀬　問屋場や宿屋などで、下女奉公をしながら売春もした女。

76 忠盛霞む絵馬ふりたり

祇園女御の名高き絵馬、別所権右衛門か筆（フデ）。

△「筆」ルビなし。

◎「霞」（春）

○祇園女御の名高き絵馬　『西鶴独吟百韻自註絵巻』「日本道に」の巻の14句目「宮古の絵馬きのふ見残す」に「祇薗に、平忠盛にとらへられし火ともしの大男おそろし」という西鶴の自注がみえる。この絵馬は、『平家物語』巻六「祇園女御」（祇園女御の元へ向かう白河法皇を供奉していた忠盛が、鬼のような化け物を組み伏せたところ、老法師であったという手柄話が載る）における、忠盛が老法師に組み付いている場面を描いた絵馬で、八坂神社絵馬堂八の間に掲げられている。西鶴は『西鶴織留』巻四の二「命に掛の乞所」でも「又祇園のやしろに、火ともしの大男、雨の夜麦わらの笠着てかよふを化物といひふらせしを、平忠盛くみとめ給ふありさま、別所権右衛門が書ける」と、この絵馬のことを記す。『日本古典文学大系48　西鶴集　下』（岩波書店、一九六〇年）では、この絵馬について頭注で「万治元年九月別所権右衛門の作、願主中村作右衛門奉納（武者雛形）」とし、続く本文中の「別所権右衛門」について「正しくは別所権左衛門則房、号雪山」とする。

77 紙かんで付ヶたる跡の雪消て

何の用なるそや。絵馬毎ひしと投付たる跡あり。箔も胡

粉も見苦しく兀たり。

◎「雪消」（春）

○箔　金・銀・銅・錫などの金属を紙のように薄く打ち伸ばし、美術品や工芸品の装飾に使用したもの。○胡粉　白色顔料の一つで、貝殻を焼いて粉末にしたもの。絵の具・塗料として用いる。

78　細き望姓（モトデ）の寒きもとひ屋

○望姓　商いの資本。○もとひ屋　元結を売る店。元結屋。元結は、男女ともに髻（もとどり）を束ねて結うのに用いる紐の類。もとは組紐、麻糸、こよりや紙を細く切ったものなどが用いられたが、寛永頃からこよりを長くよって水に浸し、車でよりをかけて締めるという製法が生まれた。

名

79　おしろいを洗ふて戻る役者共

四条ノ縄手もとゆひ。

○四条ノ縄手　京都鴨川の東、四条通りと縄手通り（大和大路）とが交差する辺り。寛文以前から、この辺りの鴨川堤に元結を商う家がみられ、「縄手元結」と称して名物の一つに数えられたという（『日本歴史地名大系　京都市』「常盤町」）。また、四条河原には芝居小屋があった。

80　出口によどむすほめ傘

鼠戸。

○鼠戸　木戸や門の扉に設けた小さいくぐり戸のこともいうが、ここは催し物や興行などの入り口に設けられた小さな木戸。鼠木戸。前句から歌舞伎芝居の木戸口のさま。○よどむ　鼠戸をくぐる際、傘をすぼめるため人の流れが滞る。

81　綿帽子のふはりと見ゆる塗足駄

是は所さためぬ夜のくゝり戸なるへし。

◎「綿帽子」（冬）

○綿帽子　江戸時代、婦女子が用いたかぶり物。はじめは中年以上の女性が用いたが、中頃からは若い女性が紅裏を付けたものを外出用としたという。時代や場所によって流行盛衰がある。○塗下駄　漆塗りの足駄。○くゝり戸　門の横に設ける脇戸や、扉や戸など大きな建具の一部に組み込んだ、くぐって通る小さな戸。大きな門や戸を閉めた後の出入りに用いる。小さな戸をくぐる際には、頭と足先がまず見える。

82　年越毎に三井の観音

大津の風俗、どや〳〵といへは、巡礼、観音に参る。

◎「年越」（冬）

○三井　三井寺（園城寺）。滋賀県大津市園城寺町にある天台寺門

宗の総本山。正暦四年（九九三）天台宗内の争いから延暦寺と分かれて対立するようになり、延暦寺が山または山門と呼ばれるのに対し、寺または寺門と呼ばれる。西国三三所（近畿を中心に散在する、三三か所の観音巡拝霊場）の一四番札所。○どや〳〵　多くの人が集まって、ざわめき動くさま。○巡礼　ここは三井寺に詣でる巡礼者。大津には三井寺のほか、西国三三所の一二番札所正法寺、一三番札所石山寺がある。また本千句の成立よりやや時代は下るが、寒川辰清編『近江輿地誌』（享保一九年刊）に記載がある近江三三ケ所のうち、近松寺、生源寺も大津にある。

83 札焼キの次而に投る恋の文

巡礼、観音にて年越の夜、札焼キあり。奉行は船頭の法師也。白袴にさすまたをつく。恋の文は柴や町ゟ投ルと見えたり。

△「柴屋町」「見へたり」

◎「恋の文」（恋）

○札焼キ　霊場を巡拝した人々は、参拝のしるしに巡礼札を納める。札焼は、そうした巡礼者の納めた札を集めて焼却すること。特に陰暦六月一七日、南院（正法寺）の観音堂で行われる三井寺の札焼が有名。なお、近世前期の諸歳時記には一二月の詞として「札納」が載るが、これは祈祷の札を納めるもので別。○奉行　ここは札焼の責任者。○さすまた　U字形の鉄製の頭部に、木製の長い柄をつけた道具。敵の首をはさんで押え込み、捕らえるのに使った。○柴や町　三井寺下にあった遊廓、馬場町の俗称。『色道大鏡』巻一二「遊廓図上」に「大津の遊郭は、世に柴屋町といひならはし侍れど、馬場町なり。柴屋町といへるは、遊郭の外下の一町をいふ。柴屋町は、むかし比良・小松わたりの柴を船につみて、爰につけてうりたる所なれば、かくいへるなるべし」とある。

84 女房よはせて少ししつまる

悪性の若気、少しの一字、字眼也。

◎句意から恋。

○悪性　酒色にふける性質やその人。遊興好きで好色な人柄やふるまい。○若気　血気盛んで未熟な若者の無分別な気持ち。

85 外宮内宮御師の儲の遣ひ捨

伊勢のあほう遣ひ、京大坂も不及。

○外宮内宮　外宮は伊勢大神宮の豊受大神宮（とようけだいじんぐう）、内宮は同じく皇大神宮（こうたいじんぐう）の通称。○御師　特定の社寺に所属して、参詣者をその社寺に誘導し、祈祷・宿泊などの世話をする者。平安中期頃から見られるが、中世に熊野三山・伊勢神宮などに大規模に発展し、江戸時代には全国的に拡大した。特に伊勢神宮の御師が有名。『国史大辞典』によると、伊勢の御師は正徳年間（一七一一～一六）には外宮五〇四家、内宮二四一家を数えたという。御師は近畿地方を中心として全国各

地の農民の間に伊勢への参宮を目的とした伊勢講を結成させ、講親を掌握することで精緻な組織を作った。○遣い捨　無駄遣い。ここは伊勢参りをする人が、ぜいたくに金を落としていき、それが御師たちの儲けになっているということ。○あほう遣ひ　惜しげもなくむやみに金を遣うこと。ここは、伊勢講の代表者として講で集めた金で参宮する人が、思い切り散財するさま。

86 京からはやる牡丹芍薬

◎「牡丹」「芍薬」（夏）

○牡丹　紅、白、紫紅などの大きな花を咲かせ、その豪華さから花の王と賞される。古来詩歌のうえで珍重されてきた。本格的に園芸植物として栽培されるようになるのは寛文年間からで、元禄年間になると『紫陽三月記』（元禄四年刊）という牡丹の専門書が著され、『花壇地錦抄』（元禄八年刊）も冒頭に牡丹を掲げる。第三百韻84句目参照。『和漢三才図会』巻九三「芳草類」の「牡丹」の項目に「凡、牡丹・芍薬の花の貴重すること、和漢時代同じ。本朝、聖武帝の時より盛んに之を賞す。今も亦奈良より名花を多出す」とあるが、ここは近世に入ってから京都ではやりはじめたことをいうか。○芍薬　ボタン科の多年草。日本には、古く中国から薬用として渡来した。初夏、茎の先端に長い花柄をのばし、紅や白などの大形の美しい花を開く。『和漢三才図会』「牡丹」項では「群花品の中、牡丹を以て第一とす。芍薬を第二とす。故に世に牡丹を謂て花王と為し、芍薬を花相と為す」とされ、『花壇地錦抄』では牡丹の次に解説される。また、同書の巻九三「芍薬」の項には「近時、名花の芍薬、頻りに多く出づ。凡て五百有余種」とあり、非常に愛好されたことがわかる。

87 干鮭の目を喰ふ船の湊入

三国新保、繁昌の地。

△「三国」

○干鮭　鮭の乾物。からざけ。『本朝食鑑』巻七「鱗部之一　河湖有鱗類十一種」のうち「鮭」の項に、「塩引」とは別に「乾鮭」として「松前、秋田及び両越を最も多くして以て諸州に伝送す。其の法、生鮭を采て腸を去り、屋上に投じ、樹杪に懸て以て乾暴、日を経」とする。なお、近世前期の諸歳時記には載らない。○目を喰ふ　未詳。○三国新保　泥原新保浦（福井県坂井市三国町）。九頭竜川河口近くの左岸に位置し、対岸の三国湊と並んで河口港として古くから栄えた（『日本歴史地名大系　福井県』「泥原新保浦」）。

88 こぼれ大豆にさはぐ君とも

北国大豆の船上ヶ、砂にこほれたるを拾ふ。君は柄杓と云

遊女の古き名。杓ははま売といふ理屈か。

△「こぼれ」の「こ」がにじんでおり、「こ」と右傍に補記。「君共」。「拾」が「捨」と誤記。「柄杓といふ」「理屈か」

◎「君」（恋）

○君　遊女。遊君。○柄杓　下級の遊女の称。『かたこと』巻三「人倫并人名之部」に「遊女を、ひしやく」とする。『本朝文選』巻四所収の木導作「出女ノ説」に「傾城・傾国は、唐人のつけたる名にして、白拍子・ながれの女は、我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまたかぞふにいとまなからん。国〳〵の名目、当世の洒落（シャラク）、柄杓（シャク）、干瓢（カンペウ）、白人、巾着のたぐひ、大むね一種より出て、位階の高下は金銀の相当なるべし」とある。

89　菜刀に剉（キサ）む思ひのうす烟

たはこのぬけから。

◎「思ひ」（恋）

○菜刀　刃が薄くて幅の広い、先のとがっていない包丁。主として野菜類を切るのに用いるが、煙草の葉を刻むのにも用いられたか。『人倫訓蒙図彙』（元禄三年刊）の「若莨や」の図には、先のとがっていない幅広の包丁で煙草の葉を刻む人物が描かれる。当時は、賃金を取ってたばこの葉を刻む賃粉切りという職人がいた。

90　泊リ枕に多賀の蕎麦切

慳貪喰ふてねてもとる客の用意。ほりものしたる木枕、皆柱の切はつしなり。されと邯鄲の枕、わたり物か、田舎ひたる一夜の夢を見るとなん。

△「ほり物」「みな柱の切はつし也」「見るとならん」

○多賀の蕎麦切　『本朝文選』巻一〇所収の雲鈴作「蕎麦切ノ頌」に「伊吹蕎麦、天下にかくれなければ」とあるように、滋賀県と岐阜県の境にある伊吹山から産出するソバの実を用いた蕎麦は有名。多賀の蕎麦切も伊吹蕎麦の一種か。○慳貪　おかわりなしの盛り切りの蕎麦切や饂飩。「けんどん」には慳貪、見頓、喧鈍、巻飩、倹飩などの字があてられるが、あて字のうち「慳貪」の本意である吝嗇から、替わりをすすめず、給仕もしないのを建て前としたための名というのが通説（『世界大百科事典』「ソバ」）。前引「蕎麦切ノ頌」に「近頃は慳貪屋の手に落て、所化寮の俄客に、青貝の手桶荷ひこみ、比丘尼宿の大よせに、錫の鉢をすえならぶ」とあるが、ここも出前で扱われたもの。○木枕　木製の枕。木を丸太のままに引き切ったものや、四方を削って四角にしたものなどがある。布の中に綿やそばがらなどを詰めて両端をとめた括枕より粗末。ここはもと彫刻が施された柱を、適当な大きさに切って枕にした。○邯鄲の枕　盧生という貧しい青年が、邯鄲で道士呂翁（リヨオウ）と会い、借りた枕で眠ったところ、栄華を極めた一生の夢を見たが、目覚めてみると、それは炊きかけていた黍が炊き上がるまでのほんのわずかの間のことであったという『枕中記』の故事。人の世の栄枯盛衰のはかなさをいうが、ここは少しの間横になるのに借りる枕。○わたり物　外国から渡ってきたもの。舶来品。

91　沢栗の持仏を開く月の影

本願寺派の持仏、かならす沢栗の扉をひらけは箔の光かゝ

やけり。一間床に直して少し明所あれは、こゝを枕と積（ママ）所とす。
△「ひらけば」「少ッ」「枕の」
◎「月」（秋）
○沢栗　櫟（くぬぎ）。○一間床　間口が一間の床の間。

92 鶴が見て居る鑓の鶏頭

鶴も鶏頭の赤きをうらやむか。くはへたる蝋燭は皆朱塗也。花らうそくといふ。白キは愁に用ゆ。
△「鶴（ツル）も鶏頭」
◎「鶏頭」（秋）
○鶴　仏前に用いる鶴をかたどった蝋燭立て。『和漢三才図会』巻一九「仏具」の項には「鶴亀　即ち蝋燭台也。鶴と亀との形を鋳成す」という説明と、鶴が亀の上に乗って蝋燭台をくわえた形の鶴亀燭台の図が載る。○鶏頭　ヒユ科の一年草。インド、熱帯アジア、アフリカ原産で、日本には古く中国から渡来し、『万葉集』に韓藍と詠まれている。夏から秋にかけて、茎の先に赤・黄・白などの小花を密集してつけ、その上縁部は鶏のトサカのような形に広がる。茎は直立して、高さ五〇～九〇センチメートルになる。なお、仏花にも用いられる。「鑓の鶏頭」とは、先端に色鮮やかな花をつけ、まっすぐに立っている鶏頭を毛槍にたとえたもの。○花らうそく　花模様を描いた蝋燭。○愁　喪、忌中。

名ウ

93 秋の雲下行雲の追ぬきて

是は菜畑に嗜たる鶏頭、刈田におろす。渡りかけの鶴、たゝ其比の秋の風情を心にためて見るへし。やり句也。
◎「秋の雲」（秋）
○渡りかけの鶴　晩秋、北方から渡ってくる鶴。

94 有馬に居あく三階の客

三階からは雫（ママ）を見るより外なし。
△「雫」が「雲」。
○有馬　兵庫県神戸市北区にある温泉。古代から知られているが、庶民の湯治場として有馬温泉が賑わったのは近世前期である。浴場は町なかの湯屋のみで、湯治客はそこに属する旅宿に宿泊した（『日本歴史地名大系　兵庫県』「有馬温泉」）。時代は下るが『摂津名所図会』（寛政八～一〇年（一七九六～九八）刊）巻九の「有馬温泉」の図には「有馬入湯の旅客は二階三階の屋造に寓じて、つれ〴〵には湯女を呼んで宴し、哥諷せ興ず。これも旅鬱の気を散ずる療養のひとつとやいふべき」という説明が付され、旅宿の二階、三階に宿泊したことがうかがえる。

95 山砂の小便臭き雨晴て

有馬の一里、匂ひ一色なり。

○山砂　有馬温泉は、六甲山地北側中腹、有馬川上流の渓谷にある。○小便臭き　アンモニア臭か。温泉の匂いといえば硫黄臭が連想され、「小便臭き」というのは不明。

96 船場へきれる真鍮の餅

船場の道は草津ゟ矢橋へのわかれと。真鍮の餅は姥か看板也。矢橋の方にあり。此あたり、道筋、皆赤砂也。山のなたれ、赤犬の兀たるかことし。

※「姥か」の「か」は別字を抹消して右傍に記す。

△「矢橋（ヤハセ）の方」

○船場　ふなば。船着き場。○草津　滋賀県南西部、琵琶湖東岸の地名。東海道、中山道の分岐点にあたる旧宿場町で、古来交通の要地である。大津へは、草津から湖面に出たところにある矢橋との間に渡し舟の便があった。○矢橋　草津市の一地区。琵琶湖東岸の旧港町で、大津の打出浜と相対し、かつては渡船場として栄えた。近江八景の一つ「矢橋の帰帆」で有名。○真鍮の餅　真鍮は銅と亜鉛の合金。色は黄色を帯び金に似て、鋳造・加工が容易なので、日用品や美術・工芸品などに広く用いられる。ここは真鍮を餅の形に加工したものを、姥が餅の看板として出しているということ。姥が餅は草津の名物。『近江名所図会』（寛政九年刊）巻二には、近江源氏の流れを汲む佐々木義賢の子孫が寛永頃に討ち滅ぼされた際に、三歳の子どもを乳母に託し、その乳母がその子を養育するために往還で餅を売り、のちに小店を設けて評判になったという話が載る。また同書には「乳母が餅の軒に標石有。矢橋の舟場まで廿五町と記せり。即、家の傍に道あり」と記され、草津から矢橋への道の途中にこの茶屋があったことがわかる。

97 鞦に桐の丸めの在郷馬

矢橋へから尻やらふなり。桐の木を用ゆるは自然の穴ある才覚か。されともろこしにも此才覚あるや。鍾馗大臣の馬の鞦、是なり。剣のさやの写しは今の包柿のわら苞（ツト）か。

△「やらふ也」「是也」

○鞦　しりがい。牛馬を制御するために尻を巻いてからみつける組緒。馬の背に載せかけて、後輪（しずわ）の左右の四緒手に通して固定し、馬の尻から尾髪の下にかけて一巡して結び下げる。胸懸（むがない）・面懸（おもがい）も合わせて鞦の一語で総称する場合もあるが、近世には狭義に用いた。『和漢三才図会』巻三三「車駕類」には、「靷」（むながき・むながい）「繋」（おもがい）とは別に「鞦」の項が立てられ、「牛馬の後へを制する所以なり。江州守山に多く之を作り出す」とある。○桐　桐の枝や幹には中に空洞があるので、鞦の紐を通すことができる。○在郷馬　田舎で農作業などの労役に使う馬。○から尻　空尻馬。本馬に対していい、人が乗らない場合は二〇貫目までの荷を、一人乗る場合には小付や布団などのほかに、五貫目までの荷を付けることができた。○鍾馗大臣　中国で疫病を払い除くとされている神。唐の高祖の時、

進士の試験に落第して自殺した終南山の鍾馗という人が、玄宗の時、衣冠を着してその夢に現れ、帝のために病気・災厄を除いたという伝説がある。日本でも魔よけの武神として、五月人形に作ったり、五月幟に描いたりする。鍾馗の鞦、剣の鞘については未詳。○包柿わらに包んで熟させた柿。

98 先見せ懸る鱒の巻藁

是はあの丶津の当世茶や、見かけほと味ひ宜しからす。

△「先」の右傍に「先」と補記。「当世茶屋」「よろしからす」

◎「鱒」（春）

○見せ懸る　見せつける。見せびらかす。○巻藁　藁を巻いて束ねたもの。鱒を焼く際に、その串を刺す台に用いる。○あの丶津　安濃津。伊勢国安濃郡の中央部を東流する安濃川の川口にある港。中世に栄え、筑前博多、薩摩坊津（ぼうのつ）とともに日本三津の一つとされた。明応七年（一四九八）の地震と津波で港としての生命を失ったが、近世になって城下町が整備されると、伊勢参宮の宿場町を兼ねて再び繁昌した。○当世茶や　当世風の茶屋。今風の茶屋。

99 勝手から親類衆の花莚

花見振舞、親類は勝手より通ル。

◎「花莚」（春）

○花莚　花見の宴席に敷く筵。また花見の宴席。○勝手　台所。座敷や店に対して、家族が日常生活をする間や裏口をいう場合もある。ここは後者か。

100 穴蜂鳴（ヒ）て覗（フシ）く節穴

こまひの竹板のふしあな、巣作りんと穴蜂の覗くは暮春の景気をのへたり。

△「巣作らん」

◎「蜂」（春）

○穴蜂　アナバチ科のハチ。土中や木の幹の穴などに巣をつくるハチの総称。○節穴　板や柱などにある節が自然に抜け落ちてあいた穴。○こまひ　木舞。壁の下地に用いる板や竹。これに縄を巻きつけた上から壁土や漆喰を塗る。「蜂とまる木舞の竹や虫の糞（フン）　昌房」（『猿蓑』）

本稿の執筆準備中の五月に、これまで本作品の翻刻・注釈作業を共にしていた藤井美保子氏が急逝されました。最終的な確認は牧の責任で行いましたが、本稿には藤井氏の知見が非常に大きく反映しています。藤井氏の多大な貢献に対する感謝の意をこめて、本稿は共著として発表させていただきます。